野口冨士男と雑誌「風景」

勝又　浩

野口冨士男文庫秋の講演会に合わせた特別展は、今年はテーマを「野口冨士男と雑誌『風景』」とした。「風景」の発行所が紀伊國屋書店にあった関係から、さまざまな資料が新宿歴史博物館に一括寄託されていたが、この度それらのうち、主に肉筆原稿など七四点の野口冨士男にかかわる資料が遺族平井家に返却され、平井家から改めて当文庫に寄贈された経緯があり、それを機とした企画である。

当文庫では「風景」については既に三回の展示を行っている。即ち「作家・編集者としての野口冨士男―雑誌『風景』の時代―」（平成一四年）、「編集人・野口冨士男――『風景』をめぐって」（平成一七年）、「『風景』における現代詩」（平成一八年）である。これらはその年の講演会のテーマと連動していたり、別途の企画としてピックアップされたりと、「風景」が関わる理由はさまざまであるが、要するに「風景」編集という仕事が野口冨士男のなかでそれほど大きな意義を持っていた事実を示していよう。

展示会場にも資料としてコピーを用意したが、「風景」の終刊に際して野口冨士男が書いたエッセイに「虚空に舞う花びら」（昭和五一年三月）があって、そこには「風景」の終刊によって「精神の一部をうしなう気がする」、「ともに育った兄弟の一人に去られる思い」だというようなことばもある。まるで血を分けた肉親のような存在だったのであろう。それは、たとえば携わった年月だけでも「足かけでは十七年」、年齢にすれば「四十代から六十代に至る」、まさに働き盛りというべき年代のすべてがそこにあったわけだ。もちろんその間、編集は野口冨士男一人だったのではない。形式的には有馬頼義、吉行淳之介、船山馨等々、一応は数年ごとに交代してはいるのだが、しかし実情はそんな名目どおりには運ばなかった。雑誌の編集経験などなかった八木義徳担当のときなどは実際上はまったく野口冨士男一人の仕事であったと回想しているエッセイもある。他の場合もおおむねは推して知るべしだったのではないだろうか。

考えてみれば、その創刊から野口冨士男が抜擢されて全面的に委託されたのは、そもそもは彼の雑誌好きと、もう一つ、長い編集経験が買われたからに違いない。彼には一三歳、慶應義塾普通部時代の回覧雑誌「同志」や、岡本太郎らと出した「KAGERO」（大正一四年）以来、数々の同人雑誌経歴があるが、決定的には昭和八年、文化学院卒業後に入社した紀伊國屋書店出版部で雑誌「行動」の編集に携わった経験だろう。これ自体は三年足らずで出版部そのものがなくなってしまうが、その間には舟橋聖一を初めたくさんの作家たちと相知ることになる。舟橋聖一を中心とした作家たちの親睦グループ「キアラの会」が「風景」の編集を受け持つことに決まり、その創刊の準備がすべて野口冨士男一人に託されるようになった背景には、こんな経歴と交遊、もっと言えば実務面での実力が見込まれた上での委託があったわけだ。ちなみに紹介しておくと、このときの

「眠れぬ夜がつづい」たほどの編集実務は、実は一切無報酬、まったくの「無償の行為」であった。

「風景」の刊行についてはおよそこんな経緯、また苦労があったのだが、しかしそれは苦労ばかりであったかと言えば、必ずしもそうとばかりは言い切れないであろう。「風景」の功績といえば、その第一に和田芳恵、八木義徳、そして野口富士男自身の作家的な復活を挙げるのが衆目の一致するところなのだ。いずれも戦前から作家活動を始めていた人たちだが、戦争のために充分な活動も果たせぬまま戦後を迎えた世代である。しかし生半可登録されていたがゆえに、戦後は新人でも大家でもないという半端な場所に立たざるを得ず、戦後文学の全盛時代にはほとんど出番を持てなかった作家たちだ。和田芳恵の一連の樋口一葉研究という仕事、野口富士男自身の徳田秋聲研究も、いってみればそうした作家としての逆境のなかから逆説的に生み出された業績だと言ってよいであろう。「風景」はそうした地味な、力量ある作家たちに仕事の場を作り、彼らの晩年を飾る良い仕事をさせたのである。

今年の講演会のゲストの一人藤田三男氏の話は、彼が編集者として立ち会った昭和三十年代後半からの日本の文壇状況、出版状況を概観するなかでの前記三人を中心とする作家たちの立ち位置を考察している。いかにもジャーナリズムの現場にいた人らしい、具体的で説得力のあるよい話だった。詳しくは本誌に掲載される講演要旨を見ていただきたいが、今それを私のことばで復誦してみれば次のようになろうか――戦後の高度経済成長期にあって、出版界も次々に大規模な文学全集を出すが、そのなかに前記三人の名は見られないばかりか、当時何種も出た文学史にもほとんど三人は黙殺されていたのである。そうして、戦後派から第三の新人、内向の世代等々と称された人々が次々に登場して来るなかで、彼ら「遅れてきた昭和十年代文学の作家」の人々は「いったいどういう暮らし向きをしていたのだろう」と問い、そういうなかでの「風景」という雑誌の存在であった、と。

「風景」は当時群生した同種の雑誌の先駆けとなったものだが、見方を変えれば、これはこれとして、やはり、高度経済成長の恩恵を受けた存在だったわけだ。文学全集には入らなかったが、自分たちの発表の場は作ったのである。

話が少々私事にわたるが、私どもが刊行する雑誌「季刊文科」(鳥影社)は、そのイメージとしては「風景」を一つのモデルとして出発した。われわれの世代には、この雑誌はそんなふうに魅力ある存在だったのだ。ただ残念ながら「風景」とは違って書店組合「悠々会」のような強力なスポンサーがあったわけではないので、持続のためには野口さんとは違った苦労を重ねている。しかし今、文学全体の落ち込み、不況が言われるなかで、商業主義からは一歩退いたところにこうした発表場所を確保することの重要性をますます強く感じている。

野口富士男が「風景」の刊行に傾けた十五年余の「無償の行為」、そのなかには、今われわれが感じているような、自分たちの自由な発表場所を確保する――そうした意義を充分感じていたからこそのガンバリがあったのだろうと、改めて思うようになった。